



「競争しようぜ」あいつは言った---こうして全てが始まったのだ。



僕はどうもこいつのことが我慢ならなかった。



あいつは熊みたいに力が強くて、太ももにはかなり筋肉が付いていて、もう髭



なんか生やして...手強い相手であるのは間違いなかった。でも僕はまた逃



げ出すわけにはいかなかったのだ。すでに何度も、怖じ気付いて逃げ出したこ



とがあったから。僕のサラダの上にミミズをばら撒かれた時も。可愛いもえち



やんの口にあいつの湿った唇を押し付けやがった時も。あの日は、僕はもえ



ちゃんを慰めることしか出来なかった。でも今回はそんなんじゃ済まないぞ。



髪がべったり額に張り付いて、あいつは僕を侮辱し、嫌味ったらしく笑った。



「競争しようぜ」あいつはそう言って、臭い息を吹きかけた。僕が1センチも



退かなかったので、僕たちはほとんどくっつくようにして向かい合っていた。



「やってやろうじゃないか」僕は低い声で答えた。「競争しようぜ」



僕たちが競争するらしいというニュースは、まさに学校中の噂となり、大き



な騒ぎとなった。スタートラインにたどり着くのに、人混みを掻き分けなけれ



ばならないほどだった。何人かは僕たちと並走するために、自転車を持って来て



いた。他のクラスのやつはカメラを持って来ていて、りんちゃんのレモネード



スタンドは大盛況^{だいせいきょう}だった。



スタートまであと数分^{すうぶん}。その時^{とき}たみちゃんがこっちへ来て、^き耳元で囁いた。^{みみもと ささや}



「勝^かてるわ。」たみちゃんは優^{やさ}しくそう言^いった。



「信^{しんじ}じてるから！」



「どうだか。」僕^{ぼく}は答^{こた}えた。



「でもそう言^いってくれて嬉^{うれ}しいよ。もう膝^{ひざ}が震^{ふる}えちゃってさ。」

「そんなのちょっと走^{はし}ったら大丈^{だいじょうぶ}夫^{わたし}よ。私^{わたし}のため^{はし}に走^{はし}って。ね？」



たみちゃんは僕^{ぼく}の頬^{ほほ}に優^{やさ}しくキスをする^{する}と、ウインクをした。



「やっぱりすごいなあって、感^{かんどう}動^{かんどう}させてくれるんでしょうね？」



僕^{ぼく}は顔^{かお}を赤^{あか}らめて頷^{うなず}いた。

「あいつに勝^かったら、それはもう感^{かんどう}動^{かんどう}しちゃうわ。」



「頑^{がんば}張^ばります！」はにかみながら、僕^{ぼく}は約^{やくそく}束^{そく}した。



たみちゃんは僕^{ぼく}の肩^{かた}を軽^{かる}く叩^{たた}くと、言^いった。



「じゃ、ゴールで会^あおうね！」



ゴールか...そこまで辿^{たど}り着^つければ良^いいけど！でもゴールまでは過^{かこく}酷^{こく}な道^{みち}のりだ。



コースは学^{がっこう}校^{がっこう}の駐^{ちゅうしやじょう}車^{じや}場^{じょう}から始^{はじ}まって、うねうねと曲^まがりくねり、閑^{かんせい}静^{せい}な美^び術^{じゆつ}館^{かん}



ちく つづ こうえん とお こうえん みち こまか えだわ さいしゅうてき いっぽん
地区へと続き、公園を通る。公園の道は細く枝分かれし、最終的にもとの一本



みち もど かつき ほうこうしゃてんごく はい きゅう みぎ ま おか
道に戻る。そして活気ある歩行者天国に入ると、急なカーブを右へ曲がり、丘



のぼ かみぎじんじゃ たど つ た はなし
をよじ登って、神木神社まで辿り着くとゴールだ。そこまで耐えられれば、の話
だけど！



ゴールまで持ちこたえることが出来るかは、なんとも言えなかった。コンディ



ションは悪くなかったけど、こんな「持てる力を全て出し切れ」系の競争は



よそうがい
予想外だったから。



どっちみち、そんなことで頭を悩ませている時間はもはやなかった。観客の



かんせい おお ひく おと な
歓声が大きくなって、スピーカーからはドラムのどんどんという低い音が鳴り



ひび
響いていた。



ぼく ひ しろ うえ た よこ じしん み あふ
僕は、チョークで引かれた白いラインの上に立っていた。横には、自信に満ち溢



れたあいつが立ち、前には、熱狂した生徒たちが、アスファルトのコースを縁取



っていた。たいよう たか いち て ねっ ほどう ひょうめん あつ
っていた。太陽が高い位置から照りつけ、熱せられた歩道の表面は、まるで暑



さばく みち まよ ひと まぼろし み すいめん ゆ
い砂漠で道に迷った人が幻で見る、オアシスの水面のように、ほのかに揺ら



み
いで見えた。



しちがつ ごご うんめいてき はじ ちよくぜん いま おも だ
七月の午後の、この運命的なレースが始まる直前のことは、未だによく思い出



せる。まだ1センチも動いていないのに、僕はもう額に汗をかいていて、背中



には^{しめ}湿ったシャツが^は貼り^っ付いていた。



「こんなにくそ暑^{あつ}くなかったらなあ…。」違^{ちが}うクラス^せの背^{ひく}の低^{じよし}い女子がおもちや



のピストルを^{たか}高く^あ揚^{とき}げた時、僕^{ぼく}はそんなことを^{おも}思っていた。ピストルが^{たいよう}太陽^{きら}に煌^めめいた。



そこから^{なに}何が^お起こったのかは、もう^{おぼ}覚えていない。



ただ^{ねつきよう}熱狂^{かんきやく}した^{かんせい}観客^{こどう}の歓声^{ひび}ばかりが、鼓動^{ぼく}のように^{まった}響^{なに}いていて、僕は^な全く^き何も



^{かんが}考え^きずに、^{はし}気づ^だけば走り^{あくま}出して^{うし}いた。まるで^お悪魔^きが後^きろから追^きっかけて来^きてい



るかのように。



^{さいしょ}最初の^{くかん}区間^{ぼく}は、僕^{ゆうせい}があいつ^{すうびよう}よりも^{ぼく}ずっと^{ほう}優^{はや}勢^{はや}だった。ゆ^はうに^は数^は秒^はも僕^はの方が^は早



く、^{おお}大き^{みず}く水^でをあ^{でき}けることが^{おも}出来^{おも}たと思^{おも}った。



だけど、その^{よろこ}喜^{なが}びは^{つづ}長くは^{ぼく}続^{さき}かなか^{はし}った。僕^みが^みずっと^み先^みを走^みっているのを見て、



あいつは^{いか}怒^{くる}り狂^まい、^か真^{かお}っ赤^{そくど}な顔^あをして^あ速度^あを^あ上^あげたのだ。そして^{ぼく}ついに、僕^ぬは^ぬ抜^ぬか

かされてしまった。



^{ぼく}僕^{いま}たちは^{びじゅつかん}今^{ちか}や、^{ちい}美術^{じゅうたくがい}館^{はし}の^{はし}近^{じゅうたくがい}くの^{はし}小^{はし}さな^{はし}住^{じゅうにん}宅^{まえにわ}街^{かだん}を走^{かだん}っていた。住^{かだん}人^{かだん}が^{かだん}前^{かだん}庭^{かだん}で^{かだん}花^{かだん}壇^{かだん}



を^{てい}手^{きれい}入^{じゅうたくがい}れ^{じゅうたくがい}しているよ^{きれい}うな、^{じゅうたくがい}綺^{じゅうたくがい}麗^{じゅうたくがい}な^{じゅうたくがい}住^{じゅうたくがい}宅^{じゅうたくがい}街^{じゅうたくがい}だ^{じゅうたくがい}った。



^{ぼく}僕^{ほこうしゃ}は^さ歩^{しゃどう}行者^まを^{なか}避^とける^だた^だめに、^だ車^{ごうおん}道^{ごうおん}の^{ごうおん}真^{ごうおん}ん^{ごうおん}中^{ごうおん}へ^{ごうおん}飛^{ごうおん}び^{ごうおん}出^{ごうおん}した^{ごうおん}もの^{ごうおん}の、^{ごうおん}トラ^{ごうおん}ック^{ごうおん}が^{ごうおん}轟^{ごうおん}音^{ごうおん}



を^た立^{ぼく}て^{ほう}僕^{ぼく}の方^{ぼく}へ^き爆^き走^きして^き来^きたので、^{ふたた}再^{いそ}び^{ほどう}急^{もど}いで^{ぼく}歩^{わか}道^{おんな}へ^{おんな}戻^{おんな}った。僕^{おんな}は^{おんな}若^{おんな}い^{おんな}女^{おんな}の



^{ひと}人^つを^と突^{あやま}き^{あやま}飛^{あやま}ば^{あやま}して^{あやま}しま^{あやま}い、^{あやま}す^{あやま}み^{あやま}ま^{あやま}せん！^{あやま}す^{あやま}み^{あやま}ま^{あやま}せん！^{あやま}と^{あやま}謝^{あやま}っ^{あやま}て^{あやま}い^{あやま}ると、^{あやま}次^{あやま}の



瞬間、道のタイルがひとつ飛び出たところに躓いてしまって、危うく balan



スを失うところだった。



遠くの方に、小さな子が道に座って、レゴで楽しそうに遊んでいるのが目に入っ



た。その子はまさに戦争ごっこの最中で、道いっぱいにおもちゃの兵士が並んで



「あいつ、あの子のところにそのまま突っ込んでいくぞ。」ライバルがそっちの



方向にダッシュするのが見えて、僕は思った。「おーい！気をつけろ！そこ、な



んか転がってんぞ！車道…」僕は最後まで言い切ることが出来なかった。とい



うのも、やつはすでに兵隊の列に突っ込んだ後で、レゴの兵士があらゆる方向に



飛び散っていた。さらにブロックが頭にも直撃し、その子は大きな声で泣き出



した。「あいつ最低だな！」頭に血が上り、さらなる怒りが湧いた。



ほどなくして、僕たちは緑がたっぷりの公園を曲がった。公園では人々はベン



チに座って読書を楽しんでいた。



僕は一旦立ち止まった。ここからコースが枝分かれするのだ。僕は途方に暮れ



て、細かく別れていく道と、さらさらと流れる水路に目をぱちくりさせた。



これは難所だぞ！もしここで迷えば、間違いなくレースに負けてしまう。



僕の作戦は、障害物も避けずにそのまま真っ直ぐ突き進む、というものだった。



ちい はし さが じかん はし あし ぬ
小さな橋を探している時間などなかった。橋があれば、足も濡らすことなく、



すいろ わた か ぼく ゆうき ふる た はんどう
水路を渡りきれたのだが。代わりに僕は勇気を奮い立たせ、ダッシュすると反動



をつけ、さいしょ すいろ せいこう
をつけ、最初の水路に向かってジャンプした。成功！



すいろ と こ ねころ ひと ぼうそう
水路を飛び越えられてホッとしていると、寝転んでいる人たちが、暴走するラ



ンナーをなにごと ふ かえ み さ しせん ひとびと さ
ンナーを何事かと振り返って見てきた。刺すような視線をかわように人々を避



けると、ぼく つぎ しょうがいぶつ そな しゅうちゅう
けると、僕は次の障害物に備えて集中した。



つぎ すいろ はば ひろ ざんねん ぼく ふ き しっぱい
次の水路は、さっきのよりも幅が広く、残念なことに僕は踏み切りで失敗した。



みぎあし たいがん ふ からだ みぎあし つづ で き
右足が対岸に触れたが、身体は右足に続くことが出来なかった。



りょうて ふ まわ ぼく あし みず なか
両手をめちゃくちゃに振り回しながら僕は足をつき、ひざのところまで水の中



にしず あし やわ だろ う そこ きもち
に沈んだ。脚はなおも柔らかい泥にずぶずぶと埋まり、底にはザリガニや気持ち



わる す うば ぼく うご
悪いゴキブリが住んでいそうだった。バランスを奪われて、僕はぐるぐると動き



まわ じょうはんしん もと もと かくとう かな だろ
回り、上半身のバランスを元に戻そうと格闘したが、叶わなかった。そして泥



がま あ ちゃいろ にご みず かお つ こ
が舞い上がって茶色く濁った水に、ついに顔から突っ込んでしまった。



びしょぬれになって、はき け もよお ぼく りくち は あ
びしょ濡れになって、吐き気も催しながら、僕はなんとか陸地へと這い上がっ



た。レースを続けるためには、すこ じかん むだ で き
た。レースを続けるためには、少しの時間も無駄には出来なかった。



さぞかしきもちわる み め あたま あしさき
さぞかし気持ち悪い見た目だったことだろう！頭 のてっぺんから足先まで、ど

ろどろしたものがべっとり貼^はり付^ついていて、まるでどっかの原住^{げんじゅう}民^{みん}が、戦^{たたか}い

に行く前^いに化粧^{まへ}をしたかのようだった。

こうして僕^{ぼく}は、確^{かく}実^{じつ}に何人^{なに}かの子^こどもたちを恐^{きょう}怖^ふのどん底^{ぞこ}に陥^{おとし}れたのだった。

もし新聞^{しんぶん}の一面^{いちめん}を飾^{かざ}ったとしても、驚^{おどろ}きではなかった。

さらにあと二^{ふた}つ、水^{すい}路^ろを飛^とび越^こえなければならなかったが、どちらも躊^{ちゅう}躇^{ちよ}せず

に泥沼^{どろぬま}の中^{なか}に突^つっ込^こんで行^いった。これ以上^{いじょう}汚^{きた}くなりようがなかったのだ。

この最^{さい}悪^{あく}な出来^{でき}事^{ごと}のおかげで、僕^{ぼく}は冒^{ぼう}険^{けん}家^かのよう^な勇^{ゆう}気^きを授^{さず}かり、問^{もん}題^{だい}なく残^{のこ}り

の障^{しょう}害^{がい}物^{ぶつ}も乗^のり越^こえていった。

公園^{こうえん}に植^うえられた桜^{さくら}の木^き々^ぎのざわめきを抜^ぬけると、ぱっと視^{しかい}界^{がい}が開^{ひら}け、人^{ひと}々^{びと}で

ごった返^{がえ}す歩^ほ行^{こう}者^{しゃ}天^{てん}国^{ごく}が見^みえた。

サラリーマンが急^{いそ}ぎ足^{あし}で、広^{こう}告^{こく}が溢^{あふ}れる道^{みち}を通^{とお}り抜^ぬけ、人^{ひと}々^{びと}は携^{けい}帯^{たい}電^{でん}話^わを片^{かた}手^てに

お店^{みせ}に群^{むら}がり、薄^{はつきゅう}給^{ぎゅう}で働^{はたら}かされているであろう可^{かわい}愛^いい女^{じょ}子^{しだい}大^{せい}生^{たい}達^{たち}が、なんか

のイベ^いントのチ^ちラ^らシを配^{くば}っていた。

この人^{ひと}混^こみの中^{なか}をこの格^{かっ}好^{こう}で走^{はし}る以^い上^{じょう}に、恥^はずかしいことなどあるだろうか？

それにこの人^{ひと}出^でじゃ、ゆっくり歩^{ある}くことだって十^{じゅう}分^{ぶん}難^{むずか}しいというのに...ラン

ナーにとっては、考^{かん}えうる限^{かぎ}りの難^{なん}所^{じょ}だった。



「どうにかしてやろうじゃないか」心^{こころ}を決^きめて、拳^{こぶし}を握^{にぎ}った。



僕^{ぼく}は全^{ぜん}力^{りき}疾走^{しつそう}する寸前^{すんぜん}だったが、その時^{とき}、左手^{ひだりて}の公園^{こうえん}の出口^{でぐち}で、何^{なに}もせずボー



っと突^つっ立^たっているライバル^{すがた}の姿^みを見つけた。



あいつは身^みをかがめて、靴^{くつ}の何^{なに}かをいじっているかのようにだったが、こちらか



らは一体^{いったい}何^{なに}をしているのか、はっきりとは分^わからなかった。



あいつ、脚^{あし}どうかしたのか？ 転^こけて怪我^{けが}でもしたとか？



「ズルい勝^かち方^{かた}はしたくないもんな」僕^{ぼく}は独^{ひと}り言^{ごと}を呟^{つぶや}くと、走^{はし}り続^{つづ}けて悲鳴^{ひめい}を



あげる身体^{からだ}を少^{すこ}し休^{やす}めるためにも、あいつを助^{たす}けてやろうと決^きめた。